



## Contents

### News

樋口ゼミ主催コンサート 開催 P.02

寺島実郎監修リレー講座  
現代世界解析講座Ⅲ 秋学期 P.03

特集 オープンキャンパス  
模擬授業レポート P.04

ゼミナール活動報告<春学期>  
地域プロジェクトの活動状況 P.06

多摩学  
吉川英治記念館(青梅) P.08

## News

## 多摩大バーチャルオープンキャンパス 開催

6月30日(水)、多摩大学経営情報学部でバーチャルオープンキャンパスを開催しました。この企画は通常のオープンキャンパスに参加が難しい関東圏以外に在住の受験生に、インターネット上の仮想空間を使って多摩大学を体感してもらおうというもの。3D仮想空間ツール「SITECUBE」を利用した多摩大学では初めての試みです。参加者はアバターに扮してバーチャル空間につくられたキャンパス内を自由に歩き回り、またサポーターの在生や職員とチャットでリアルタイムの対話も体験、新しいオープンキャンパスの形となりました。



在学生と職員がネットを通して受験生と対話

## 就活ひざづめフォーラム in 多摩大学 開催

第3回目(全6回)「就活ひざづめフォーラム in 多摩大学」が、7月14日(水)9時半から16時半まで221教室で開催されました。就活相談にとことん乗る「完全就活支援学内合同企業説明会」。参加企業は10社あり、学生が面接を受けたい企業を選べる「ドラフトカード制」や、企業側も面接をしたい学生を指名できる「会場内指名制」を導入しました。面接をする側も受ける側も相手を見極める真剣な対話の場、これまでに開催された第1回と2回では機会を活用して内定を得た学生もいます。次回は10月13日(水)に開催予定です。



企業と学生との面接はどちらも真剣

## グローバルスタディーズ学部 特別プログラムを開催

7月11日(日)に多摩大学湘南キャンパス(グローバルスタディーズ学部)にて、小山知子先生による特別講演「航空会社で働くということ」が行われました。先生は元客室乗務員、現在は講師派遣提携を行うANA総合研究所の研究員で、グローバルスタディーズ学部の講師も務めています。午後には「ホスピタリティーとマナー」と題した特別演習も行われ、多くの方にご参加いただきました。空港の1日を紹介するDVD上映、お客様へのサービスの仕方等の実演も行い、客室乗務員の仕事についての理解を深めました。



小山先生の指導でお客様サービスの仕方を体験

## 村山ゼミ生が「紙芝居×クラシック」イベントを開催!

8月7日(土)・8日(日)・12日(木)～15日(日)まで村山ゼミ「日本大好きプロジェクト」の学生が、東京ミッドタウンの「MIDTOWN SUMMER」イベントとして「Tokyo Midtown Kids Week 紙芝居×クラシック」を開催しました。ゼミ生が作成したオリジナルの紙芝居に国立音大の関係者によるクラシックの生演奏が加わり、子どもから大人まで物語に引き込まれるイベントになりました。ミッドタウン内の各所で、午後から3回開催された紙芝居とクラシックのコラボレーションは、来場された多くの方にこれまでにない感動を伝えることができました。



紙芝居とクラシックコンサートのコラボ

## 樋口ゼミ主催コンサート 開催!

8月25日(水)HAKUJU HALLにて樋口ゼミ主催のコンサート「音楽の宅急便 ジブリからクラシックへ」が開催されました。ピアノ、ヴァイオリン、ソプラノの一流の音楽家とともに樋口裕一先生とそのゼミ生が企画、親しみやすく温かみに溢れた内容となりました。樋口ゼミでは「学生の企画運営によって、一流の演奏家による感動のコンサートを開き、多摩地区を中心にクラシック音楽の輪を広げていく」という目標を掲げて活動しています。夏休み中ということもあり小学生の来場も多く、普段は触れる機会が少ない一流の演奏に聴き入っていました。



コンサートの来場者を迎える樋口ゼミの学生たち

## 日本テスト学会第8回大会 開催

8月30日(月)・31日(火)2日間に渡り、多摩キャンパスにて「日本テスト学会第8回大会」が開催されました。日本テスト学会は、科学的根拠に裏付けられたテスト法の定着と評価技術の研究・開発及び普及を促進し、その発展に貢献することを目的に設立され、大会・研究会及び講習会の開催やWEBなどを利用した機関誌刊行などの活動を行っている団体です。毎年1回、会場とテーマを変え開催されてきました。今回はその第8回目として「スキルを測る」というテーマで、本学会会場に開催されました。



研究成果の発表に熱心に聴き入る参加者たち

寺島実郎監修リレー講座 現代世界解析講座Ⅲ 秋学期

[http://www.tama.ac.jp/info/lecture\\_relay2010.html](http://www.tama.ac.jp/info/lecture_relay2010.html)

「寺島実郎監修リレー講座 現代世界解析講座Ⅲ」春学期は好評を博して終了しました。秋学期の講座は10月7日(木)から1月13日(木)までの全12回、多摩キャンパス001教室にて開催されます。各界で活躍する識者による講義を多摩大生200名と一般社会人の聴講生、大学院生、他大学の学生など300名が大学の壁を越えて受講します。

(秋学期の募集は定員に達したため終了しました)

多摩大学 寺島実郎監修リレー講座 開催スケジュール

<各回木曜日 14:50 ~ 16:10 >

第1回	10月7日(木)	寺島 実郎	多摩大学学長 (財)日本総合研究所理事長 (株)三井物産戦略研究所会長	「2010年夏の総括—世界はどう動いているか?」
第2回	10月14日(木)	嶋中 雄二	三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)参与 景気循環研究所長	「内外景気の現状と今後の見通し」
第3回	10月21日(木)	金 美徳	多摩大学経営情報学部教授	「朝鮮半島と北東アジアの行方」
第4回	10月28日(木)	天江喜七郎	同志社大学客員教授 元駐ウクライナ大使	「2012年、プーチン・メドヴェージェフ体制とロシアの選択」
第5回	11月4日(木)	諸橋 正幸	多摩大学経営情報学部長	「インターネット上の集合知とその活用」
第6回	11月11日(木)	寺島 実郎	多摩大学学長 (財)日本総合研究所理事長 (株)三井物産戦略研究所会長	「時代をより深く考えるということ—世界史の中での日本」
第7回	11月18日(木)	中西 哲生	スポーツジャーナリスト	「日本サッカーの現在と未来」
第8回	11月25日(木)	橋本 俊詔	同志社大学経済学部教授	「格差社会の行方」
第9回	12月2日(木)	岸井 成格	(株)毎日新聞社 主筆	「混迷政治の歴史的な背景 —第三の転換期は第三の建国の時」
第10回	12月9日(木)	田中 優子	法政大学社会学部および 国際日本学インスティテュート教授	「グローバリズムを江戸から考える」
第11回	12月16日(木)	尾木 直樹	教育評論家 法政大学キャリアデザイン学部教授	「グローバルにIT化する中での人間の発達 —子育てと教育の基軸を考える」
第12回	1月13日(木)	寺島 実郎	多摩大学学長 (財)日本総合研究所理事長 (株)三井物産戦略研究所会長	「2011年、日本創生への視座」

※敬称略・役職は2010年9月時点のものです。

## 中国からの留学生にインタビュー

2010年4月より多摩大学経営情報学部で学んだ中国からの留学生、マイル・ジンゲルさん、李鳳蕊(リホウズイ)さん、李芳芳(リホウホウ)さんの3名に日本での生活や将来の夢などを聞いた。マイルさんは新疆財經大学に在学し、来年3月まで1年間の留学。新疆ウイグルから来日した。鳳蕊さんと芳芳さんはいずれも天津財經大学に在学し、今年8月末まで半年間の留学。二人とも天津からの来日だ。日本はゴミの分類がしっかりしていて環境が美しく、人は親切でやさしいと好印象。しかし物価が高い、家賃が高い、道が狭いなどのマイナス面も。多摩大では日本語を学びながら、ゼミに参加して課題研究を行ったり、文章伝達入門、リサーチ入門、エリアスタディなどの授業を受けたりした。先生や友達が親身になってくれてクラスは家族の雰囲気だ。滞日中は留学生2~3人で賃貸マンションに住み共同生活。マイルさんは友人達を家に招きウイグル料理を振舞った。鳳蕊さんも友人達と中華料理を作って一緒に食事。芳芳さんは皆とレストランやゲームセンターを楽しんだ。3人とも商店街の七夕祭イベントに参加するなど多摩大生とともに地域活動にも取り組んだ。マイルさんの好きな日

本料理は寿司と焼き鳥、鳳蕊さんはお稲荷さんだ。芳芳さんはオムライスと学食のメニューが好き。唐辛子がたくさん入った辛い中国料理は大好物だがワサビは苦手だ。マイルさんの故郷である新疆ウイグルは地下資源が豊富で、果物の種類も多い地域だという。今年6月には大学院に進学、日本語を上達させ日本で就職しウイグル民族を紹介したいと考えている。鳳蕊さんの故郷の天津は工業地域で日本企業も多い。公務員か日本企業への就職を希望している。また芳芳さんは天津で日本関係の仕事につきたいと思っている。



写真左から李鳳蕊さん、マイル・ジンゲルさん、李芳芳さん

# オープンキャンパス

オープンキャンパスで開催される模擬授業は、高校生にとって多摩大学のゼミや教員、実際の授業を知る貴重な機会でもある。最初は緊張気味だった高校生たちも次第に授業に解けこみ、活発に発言する姿もあった。

# 模擬授業



6/27 (土) 13:50 ~ 15:20 アリーナ

スペシャルプログラム

『サンリオピューロランドの課題解決ゼミ体験』

松本 祐一 准教授

体験学習は経営情報学部の産学協同プロジェクトゼミ「集客施設のマーケティング～サンリオピューロランドの課題解決イベントの企画・運営を考える～」の授業の一環。午前中は高校生 100 名がゼミ生に引率され、サンリオピューロランドで体験学習を行った。13 時 50 分から多摩キャンパスのアリーナにて、スペシャルプログラム「サンリオピューロランドの課題解決ゼミ体験」を開催。テーマは『サンリオピューロランドの高校生イベントを考えよう』。「高校生は〇〇に興味があるので、ピューロランドの〇〇を使って、〇〇というイベントを開催する。このイベントに来ると高校生は〇〇になる」。高校生向けのイベントのアイデアを考え、〇〇に入ることをばを当てはめてもらう。ゼミ生を交えたグループに分かれて行動する。自己紹介と最近あったいいことを話し、聴取者は拍手で応えて打ち解けた雰囲気。授業では顧客ニーズを調べるために、自分が今興味、関心のあることを 1 人 3 つ (1 枚の付箋に 1 つ)、なるべく具体的に書いて白板に貼りだしていく。次にグループごとに白板に貼られた付箋の内容をメモしながら調査 (1 グループ 3 分)。高校生の興味・関心の傾向を分析し、ピューロランドの感想を共有、ピューロランドの魅力とは何かを話し合う (30 分)。最後にグループごとに高校生が喜びそうなイベントを考え、模造紙に書き出して発表した。活発に意見交換が行われ、意表をつく楽しいアイデアも飛び出した。「高校生は服とダンスに興味があるので、ピューロランドのキャラクターを使って、高校生がデザインした洋服を着たキャラクターと一緒に高校生がダンスをするというイベントを開催する。イベントに来ると高校生は盛り上がる」「高校生はキャラクター・スイーツ交流に興味があるので、ピューロランドの知恵の木を使って、ピューロランドでスイーツフェスタというイベントを開催する。このイベントに来ると高校生はハッピーになる」



7/24 (土) 11:00 ~ 11:50 112 教室

模擬授業

『オマケを科学する

～森永・キョロちゃんを検証する～』

豊田 裕貴 准教授

森永チョコボールを例にオマケからみたマーケティングを解説する体験型講義である。初めに「マーケティングとは何か?」パワーポイントを使って講義が行われた。マーケット(市場)の主役は消費者。相手の立場に立てるとなるとマーケティングが分かる。マーケティングの基本は4つのPだ。「product(製品)」「(製品そのものをよくする・工夫する)」「price(価格)」「(適切な価格)」「place(流通)」「(店での陳列)。そして「promotion(プロモーション)」「(オマケ・広告)。ここで先生から高校生に質問。「最近買ったチョコレートは?どれくらい前に(何分何秒前)に銘柄が浮かんだか?」。おそらくお店に行き決めたのではないだろうか。チョコレートはたいていその場で衝動的に買う商品。その時に有効なのが「オマケ」だ。森永チョコボールは金・銀のマークでオマケの缶詰がもらえるから、当たりが欲しい人は買うことになる。

用意された大量の森永チョコボールがグループごとに配られた。皆で開封し、何個に1個あたりがあるのか調べてみる。「当たりが出るまでのワクワク感とイライラ感の間はいつくらいか?」「どれくらいの割合で当たりがあるのか予想してみよう」。チョコボールという身近な題材とだれでも一度は予想したことがある当たりの確率。高校生たちはワクワク感を味わいながら、互いに思いついた確率を発言した。

高校で学ぶことは「理屈」、大学で学ぶことは「理論」、世の中は「実証」。理論で解けるものは誰がやっても同じで差別化できない。「皆さんには理屈では分からないがこんなことがあったらおもしろい、というアイデアを出して欲しい。本当におもしろいと思ったことを発見しても年上の人には理解できないかもしれないが、想像の範囲内ではおもしろくない。おもしろいことを考えてチャレンジしてほしい。マーケティングは役に立つ分野、ぜひ勉強してもらいたい」。



7/24 (土) 13:00 ~ 13:50 101 教室

スペシャルプログラム

『人々を幸せにする、

ウォルト・ディズニーの経営思想に学ぶ』

望月 照彦 教授

毎年1600万人以上の来場者がある東京ディズニーランド。このような魅力ある施設を発明したウォルト・ディズニーはどんな思想や構想をもっていたのか。アニメから都市づくりまで数多くの事業を創りあげたディズニーの少年時代からテーマパークを開設するまでの物語。人物とその魅力を解説しながら、世界中に夢を与えたディズニーの経営思想について講義が行われた。

アメリカが生んだ最大の発明は、飛行機産業、自動車産業、コンピュータ産業、そしてディズニーランドという夢・幸福産業(happiness industry・fantasy business)である。ウォルト・ディズニーは1901年シカゴで大工の4男として生まれた。高校時代に第一次大戦のヨーロッパに従軍したこともある。その後新聞にマンガを掲載する事業を始め、22歳でアニメの会社を起業した。漫才師、マンガ、アニメーション、映画、博覧会のプロデューサー、テーマパーク、リゾート、都市づくり、教育産業など数々の仕事を経験。一番大切で最大のパートナーは家族だった。企業哲学は「大衆の信頼」「過去の栄光にのらない」「常に新しい挑戦」。アニメ「バンビ」制作の際には鹿の親子と3ヶ月一緒に生活し、スケッチと研究を行うというこだわりぶり。最初のカラーアニメ「3匹のこぶた」の制作、トーキー漫画、キャラクター(ミッキー)、ライセンス販売、ストーリーボード、長編漫画、コンサート映画、ファンタサウンド、スタジオリゾート、ドキュメント映画、テーマパーク。ディズニーはかつてない産業を生み出してきたコンセプト・イノベーターでもあった。最も信頼するのは才能と直感、好きな言葉はペーソス(悲しみ)、最も尊敬する人はチャーリー・チャップリンである。

『エンターテインメント産業』とは、招いてみんなを喜ばせるもの。『サービスマネジメントビジネス』は、多摩大学を起点に始まった。どうしたら多くの人が集まるのか、人を幸せにする産業のあり方を多摩大で勉強してほしい。

## 2010年度 ゼミナール報告 〈春学期〉

ゼミナール情報は多摩大学HP<<http://www.tama.ac.jp/>>からアクセスできます。

## 久恒ゼミ（顧客満足ゼミ）

図解の技術を身につけ、多摩をフィールドに顧客の視点で問題解決していく顧客満足ゼミ。地域に関心を持ち、さらに多摩地域への就職も視野に入れて活動。「多摩やきものプロジェ

## 地域活性化プロジェクト

久恒 啓一 教授

クト」「東京ヴェルディ地域活動支援プロジェクト」「オーラルヒストリープロジェクト」の3つのプロジェクトが同時進行している。

## HPで多摩の特産品を広く紹介

昨年開始した「多摩やきものプロジェクト」。多摩市の特産品を見つけてHPで市外の人に紹介し、地域の人にも多摩市の特産品を知ってもらい宣伝していくことが目的だ。今年4月に「多摩市の特産品」を紹介するサイト「多摩とくネット」(<http://tama-toku.net/>)が完成し具現化された。多摩の土でつくる「多摩焼」で高齢者の活動の場を支援する「やきもの世代交流会」代表の水野宏さんと久恒ゼミとの共同で運営していく。作成にあたりゼミ生たちは、市内の特産品製造者

## 多摩やきものプロジェクト

松本 祐一 准教授

の方々取材した。HPでは「多摩焼」の他にも「多摩うどん」「どんぐりクッキー」「福ホドル大福」「地酒」「地味噌」「桜の塩漬け」などをゼミ生による記事で紹介している。さらに「多摩焼」の活動を随時紹介するニュータウンの賢人ブログ「多摩焼の挑戦」、学生たちの活動の様子を紹介する多摩焼プロジェクトブログ「多摩の探検隊」なども加えて内容を充実させた。将来的にはHPを通してネット販売ができるようにもしたいと考えている。

## 応援フラッグイベントで集客人数アップを目指す

## 東京ヴェルディ地域活動支援プロジェクト

松本 祐一 准教授

多摩市はJリーグクラブ「東京ヴェルディ」のホームタウンの一つ。クラブを知ってもらい、多摩地区からの集客人数をあげる。さらに東京ヴェルディを通じて多摩の地域活性化にも貢献していくことがプロジェクトの目的だ。10月16日(土)には味の素スタジアムで東京ヴェルディ「多摩市サンクスマッチ」が開催される。試合の情報を地域に発信するため、9月4日(土)、5日(日)の永山名店街秋祭り、9月25日(土)の永山フェスティバルで子どもを対象に応援フラッグ作り

を実施した。当日フラッグを持って来てくれた子どもにはゼミ生手づくりのミサンガをプレゼントする。試合当日も会場でフラッグイベントを開催し、サポーターに参加してもらう。また東京ヴェルディの許可を得て、今年からロゴマークやキャラクターを使ったフェイスシールも作った。フラッグやフェイスシールで参加者に応援する楽しみを味わってもらいたいと考えている。試合当日も含めたすべてのイベントで、レジャーとサッカー観戦に関する保護者向けアンケートを行っていく。

## インタビューでコミュニケーション能力を高める

## オーラルヒストリープロジェクト

中庭 光彦 准教授

オーラルヒストリーとは関係者から直接話を聞きまとめること。プロジェクトではゼミ生たちが多摩市や稲城市で暮らしている方々から、今と昔の変化とご自身の歴史をインタビュー・ライフストーリーとしてまとめる。対象者は公園管理者、農業従事者、ゴミニスト、個人商店のご主人、老人ホーム利用者、主婦など、年齢を問わずゼミ生一人につき一人の方を選び出した。先生からのアドバイスで、対象者には依頼状を送って申し込みをし、電話で取材の日時を決めた。夏休み中

にインタビューとテープ起こしを行い、9月下旬からのゼミで原稿にしていく。最終的には全員の原稿を1冊の本として作り上げる。ゼミ生にとって自分の知らない人から話を聞くという機会はめったになく緊張感のある体験だ。「相手の思い出したくないことは追及したくない」「なるべく雑談を含めて、話しやすい雰囲気をつくりたい」と取材を前にゼミ生は話した。未知の人と話をすることでコミュニケーション能力を高め、就職活動に役立てていくこともプロジェクトの目的である。



## 「多摩学」「環境」研究の途中経過を発表

インターゼミ (社会工学研究会)

塾長 寺島 実郎 学長

毎週土曜の午後4時20分から九段サテライトにて行われているインターゼミは、寺島実郎塾長のもと学部・大学院・学年をまたぎ、さらに10名の教員も加わり塾形式で課題に取り組んでいる。今年度のテーマは「アジア:経済」「アジア:歴史・文化」「多摩学」「サービス・エンターテイメント:観光」「サービス・エンターテイメント:ディズニー」「環境」の6グループ。それぞれのグループが1年間、文献研究やフィールドワークを通して、それぞれのテーマの問題解決策を探求し、最終論文にまとめる。6月19日(土)のゼミでは、「多摩学」「環境」について学生による研究の途中経過が発表された。「多摩学」チームはグローバルとローカルの2つの言葉を組み合わせた「グローバル」を用い、八王子千人同心や26市3町1村からなる「多摩県」の提案、年間計画を発表。また「環境」チームは環境保全と経済成長の対立、環境経済、技術・制度・倫理などについて発表。教員、インターゼミ生から様々な質問があり、寺島塾長から感想とアドバイスが述べられた。



## 多摩市内をフィールドワーク

多摩大学版『多摩観光ブック』をつくる!~多摩市のシティセールス

中庭 光彦 准教授

中庭ゼミでは6月5日(土)、多摩市のフィールドワークを実施した。午前10時に京王永山駅に集合し東寺方小学校へ。ホテルの復活に取り組む東寺方自治会の塩沢三男さんと宝泉院の津守住職を取材し、小学校前を流れる大栗川や地域の昔の様子、自然環境を活かしたホテル復活のご苦労などの話をお聞きした。聖ヶ丘商店街にある社会福祉法人「時の会」が運営する多摩うどん「ぼんぼこ」で昼食タイム。店のうどんは多摩の地粉を使用し自家製めん機で打ち、汁は昆布、煮干し、カツオだしから作っている。聖ヶ丘商店街から都立桜ヶ丘公園に向い、旧多摩聖蹟記念館の所蔵品などを見学。さらにスタジオジブリのアニメ映画「耳をすませば」の舞台となった桜ヶ丘の「みみすまロータリー」へ。みみすまファンなら必ず立ち寄るといっ洋菓子店「ノア」で「みみすまノート」を開き、店主から話を聞く。最後は多摩ニュータウンで最初に開発が始まった諏訪・永山地区。病院が並ぶ諏訪の「医者通り」や商店街を取材。高齢者の集う喫茶ルーム「福祉亭」で、地域の方から話を伺った。



## 諏訪商店街のイベントに「七輪横丁」出店

片桐ゼミ・梅澤ゼミ・中庭ゼミ・TAMAUNI・多摩大有志

7月3日(土)、4日(日)に多摩諏訪名店街で開催された「諏訪近隣交流フェスタ☆七夕イベント」に多摩大生が「ふれあい七輪横丁」を出店した。片桐ゼミ、梅澤ゼミ、中庭ゼミ、TAMAUNI、また他ゼミ有志、グローバルスタディーズ学部の学生など23名が参加。片桐ゼミによるマッチングでゼミの垣根を超えた学生の参加が実現した。七輪と炭は無料で貸し出し、商店街の店と提携して野菜と肉のセットを販売。食材などは持ち込み可能とし、交流を楽しみながら食事をするスペースとして提供した。コンセプトは「世代を超えた交流」。屋台を通して地域の交流を深め、さらに商店街の活性化にも役立つ。「場所の設定や準備など最初は苦戦して手探り状態だった。周囲のアドバイスを受けながらの試行錯誤。協力してくれた商店街に恩返ししたい」と学生。2日目は食材セットを値下げしたり、足が痛くて座れない人のためにテーブル席を用意したりと臨機応変に対応した。来客からアンケート調査を行うことで今後のイベントに活用し、さらに商店街の活性化のために提案をしていく。



## 花火大会でアンケート調査と写真撮影

多摩市観光プロジェクト

コーディネーター 松本 祐一 准教授

8月10日(火)、「せいせき多摩川花火大会」で、多摩大生が「ハッピーフォトモザイク」のための写真収集とアンケート調査を行った。「ハッピーフォトモザイク計画」とは笑顔の写真を10,000枚集め、幸せな写真でフォトモザイクアートを作り多摩市の魅力を伝えようという試み。また来場者アンケートは酒井ゼミの学生が担当し、来場数やきっかけ、交通手段、今後の運営など花火大会に関する意識調査を行った。プロジェクトは野田ゼミ20期の他に豊田ゼミ、出原ゼミ、酒井ゼミ、浜田ゼミなどの学生からなる「Tamauni」メンバーが中心となって活動している。当日は多摩大有志も加わり、参加人数は総勢約60名にもなった。14時30分からの全員ミーティングで気合を入れ、15時30分から2~3人のグループで花火大会開始前の会場を歩き回った。写真収集担当の学生たちは会場で市民一人一人に主旨を説明し笑顔を撮影。アンケート担当の学生たちは1,000枚収集を目標に活動。アンケートの結果は後日集計し報告書としてまとめ、多摩市にフィードバックしていく。

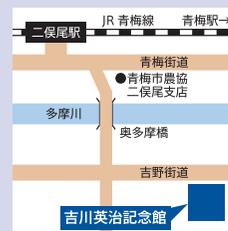


## "多摩" 人物紀行—— ②

多摩学  
002

母屋（写真左）、書斎（写真中央下）、部屋の中央には執筆を行った座卓。座卓の上には書籍、万年筆、虫眼鏡、硯などがある（写真中央上）。写真右は吉川英治。

（写真提供：吉川英治記念館）



## 吉川英治記念館

東京都青梅市柚木町 1-101-1

☎ 0428-76-1575

営 10:00 ~ 17:00 (3月 ~ 10月) 10:00 ~

16:30 (11月 ~ 2月) 休館日 月曜・年末年始

入館料 大人 500円・中高大学生 400円

<http://www.kodansha.co.jp/yoshikawa/>

JR 青梅線「二俣尾駅」下車徒歩 15分

## 吉川英治記念館（青梅市）

久恒 啓一（多摩大学経営情報学部教授）

<http://www.hisatune.net/>

国民作家と呼ばれるほど読者の多かった吉川英治（1892-1962年）の記念館を青梅を訪ねた。この記念館のある場所は当時は西多摩郡吉野村といった。多摩という名称は随分と広い地域を指しているのだと改めて実感した。野村という庄屋の家を自宅として使用した土地と家がそのまま記念館となっている。ここを吉川は草思堂と名付けた。吉川英治は疎開先のこの梅の里を愛しており、2千坪にのぼる土地と家を気に入っていた。母屋は外からしか覗けないが、「吾以外皆吾師」という吉川英治の座右の銘を見ることができる。

母屋にくっついた形で明治中ごろに建設されたという洋館を吉川は書斎として利用していた。戦後しばらく筆を折っていたが、「宮本武蔵」とともに代表作とされる「新・平家物語」を58歳からこの書斎で執筆している。方形の書斎は、中央に座卓が置いてあり、原稿用紙を押さえるぶんちん、眼鏡、虫眼鏡を載せた地図、日本医学史などの厚い書籍や辞書類が卓上に並んでいる。

実家の没落で11歳で小学校中退となった吉川英治は時絵職など職を転々としたが、32歳から本格的に作家の道を歩みだす。「剣難女難」、「鳴門秘帖」、「親鸞」などを書き花形作家となる。昭和10年から4年にわたって朝日新聞に連載した「宮本武蔵」では、剣禅一如の道を歩む新しい武蔵を書いた。この連載は、求道、克己、そして絶え間ない向上心がテーマであり、人生の書として人気を博した。また「新書太閤記」、「三国志」など吉川は新聞連載小説の名手だった。そしてこの地で7年間にわたり大作「新・平家物語」に没頭する。この大作を書き終えたとき、「七年の反古より脱けて蝶と化す」とその心境を記している。

吉川は昭和35年、八木治郎アナウンサーのインタビューに「読者は自分を読んでいる」と答えている。「読者の呼び水が僕、それが小説の書き方の秘密」だった。そういう工夫を吉川は小説の中に

盛り込んだのだ。そしてどのような作品にも、今現在という時代を投影させていた。「吾以外皆吾師」という言葉とともに「大衆即大知識」という言葉も好きな言葉だった。まさに大衆とともに生きた国民作家だった。

吉川英治は恋愛よりも、家族愛を描くことに自らの資質を自覚していた。親子、兄弟などの骨肉の愛情を描くことがテーマだった。骨肉愛に対する意識は没落時を家族の団結で乗り切ったことも影響している。初めの不幸な結婚を経て、大きく年の離れた賢夫人・文子との結婚によって、吉川の仕事は順調に伸びていく。和やかで幸せな家族をきずいていたことは、家族の写真が示している。円満な家庭を喜んでいたのは、「子らは皆よき母もてり この父は机ぐらしのそとにあれども」というユーモアと愛情のこもった歌からもわかる。

「外国物を翻訳したり、江戸文学を焼き直すよりも、自分の考えのほうが、遥かに、すぐれていると、僕は、つよい自惚れを持っている」と吉川は語っている。正史は信用ならない、とも言っている吉川は、自分の頭でどこまでも考える人だったようだ。

「逆境に育ち、特に学問する時とか教養に暮らす年時などは持たなかった為に、常に、接する者から必ず何か一事学び取るということをお忘れの習性を備えていた。---彼が学んだ人は、ひとり信長ばかりでない。どんな凡下な者でも、つまらなさそうな人間からでも---我れ以外みな我が師也。としていることだった」。これは「新書太閤記」にある秀吉を描いた部分だが、これは吉川英治自身でもあった。

「夫婦の成功は、人生の勝利です。人間の幸福なんていうものは、この辺の所が、最高なものではないでしょうか。...帰るとことは、平凡なものです」という感慨が吉川にはあった。仕事に恵まれ、よき伴侶に恵まれ、骨肉愛を確かめた吉川英治の人生は、本人にとって満足のゆくものだったに違いない。

## Information

11月6日（土）・7日（日）に、多摩キャンパス、湘南キャンパスそれぞれのキャンパスにて学園祭が開催されます。多摩キャンパスでは、第22回の雲雀祭を「共」というテーマを掲げて開催します。



## Rapport

Number .072

発行 多摩大学  
東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1  
TEL:042-337-1111 FAX:042-337-7101  
編集・印刷 株式会社 インフォテック  
発行日 2010年9月30日

<http://www.tama.ac.jp/>